



■「斎藤吾郎の全活動を語ろう、具」展 4/9-5/29 高浜市やきものの里かわら美術館

凝ったタイトルであるが、このフレーズの特異性に[斎藤吾郎]のキャラクター、これまでの全活動の履歴、生活信条、明日に向けての全てが込められている。

斎藤氏は、三河在住の土着性に根ざした[赤絵]の画家として知られるが、単に[画家]なのでなく、民族資料はじめ、あらゆる文化財/非文化財のコレクターであり、ガラクタ博物館館主であり、ジャズ・フォークミュージシャンであり、俳人であり、俳誌エディター、イベント企画オーガナイザーなど一口にいえない多彩な領域に才能を発揮する異能のマルチタレントである。

独立展をはじめ、年間に多くのグループ展、企画展、個展をおびただしく参加開催、絵描き版画家としての旺盛な制作・発表活動だけを見ても、そのボリュームと密度の高さ、絶えず新領域を開拓する意欲の鮮度に驚かされる。

◆何でもあるマルチメディアエキジビジョン

今回の展覧会も、[美術館]とは言いきれない多彩な内容を盛り込み、だからチラシに現わされるように[ナニコレ?]と言いたくなる[判じ物]的表現にならざるを得ないのである。

ここには、ことば遊び、ごろ合わせ、クロスワードの仕掛け、ギャグ、ジョークとユーモア、いたずら好き、ずっこけ感覚、直情のアタック精神、非・常識行動のすべてが凝縮され、言葉だけでなく、コレクションボックスのようなグラフィックにも雄弁に表現され、斎藤氏の日ごろの行動原理、活動の一端を少しでも知る人ならば、このチラシを見るだけで、どんな展覧会なのか、一目で了解するだろう。



展覧会以前に、チラシ一枚にこだわってしまったが、これだけでもって[展覧会]を閉じても良いくらいなのだが、やはり大なる好奇心を掻きたてられ、9日のオープニングに出かける予定が都合つかず、翌10日に観覧した。

作品は、1階には油彩画、三河のフォークロアテーマの大作を並べ、中央ステージと絵の前の展示台に、関連する民具、民族資料を展示する。自ら[ガラクタミュージアム]と名付けるコレクションは[腐らないものなら何でも]というのがポリシー、ありとあらゆるモノが集められ、なるほどガラクタとしか言いようがないが、しかしかって暮らしの周辺にあり、モノの役に立った日用の道具、家具、電化品、遊んだおもちゃ・ゲーム、仕事具、看板、学用品、祭飾り、愛着のメモリアル - 到底分類しきれない、それらが[図鑑パノラマ]を思わせる絵と見事に対応しているのがわかる。

◆ゲンキは赤絵の中に

2階は、吾朗の画業の歩みをほぼ年次的にたどる展示、最初期の作品から、次第に独自の様式、テーマの発見に向かい、[赤絵]に到達する過程をたどる。[油彩を描いて50年]を一区切りしての企画であるが、その間に[俳画]に新風を吹き込み、近年はシルクスクリーンの技術を習得、刷技、色彩表現の工夫、ガラス絵を試み陶額まで自作するなどクラフト領域に踏み込む。



最初のパリ行きに母への「土産」として模写、飛躍の端緒となった[モナリザ]は、三河に伝わる[土人形]を添えて立体展示、半ば伝説化したレオナルド・ダ・ミカワの名画に対面することもできる。

1階ミュージアムショップに図録、絵葉書、絵本など関連図書、ステーションナリ、ファッションアイテムなどオリジナルグッズ類を並べる。異色は西尾が有数の茶所であり、抹茶生産で首位を占めることから、抹茶素材の和洋菓子を開発、パッケージデザインが吾朗イメージで、NISHIOの地域おこしに一役買っている。

ロビーに瓦屋根を設定、赤バックで記念撮影するセットを設置しているのは、「かわら美術館」ならではの趣向。マルチメディア的多彩と賑やかさあふれる演出は、まるで「ワンマン展覧会」。

誰もがゲンキを振舞われるであろう。

